

学 界 報 告

[学 会 名]

ISST CONGRESS 2019, 25th Congress
of the International Society for Sandplay
Therapy

[参加セッション名]

TM meeting, "Cries of the world"2,
Keynote1/2/4/5/8/9, General Assembly

[大会期間]

2019年9月5日(木)～
2019年9月9日(月)

国際箱庭療法学会 (ISST) の第 25 回大会がドイツ、ベルリンの Harnackhaus Dahlem で開催された。この会場は、マックスプランク研究所やベルリン自由大学のゲストハウスで、アインシュタインを含め幾多のノーベル賞受賞者を輩出した由緒あるところであった。著者が佛教大学に着任した 2009 年に第 20 回大会が佛教大学と京都国際会議場を会場に日本で開催され、著者も運営に関わったことは記憶に新しい。その後 2 年ごとに大会は開催され、2011 年の第 21 回大会 (スイス、Ittingen) では事例発表の司会兼指定討論者、2015 年の第 23 回大会 (カナダ、オタワ) では事例発表者として参加した。2013 年のイタリアの大会から 6 年ぶりにヨーロッパに戻ってきた今回の第 25 回大会で、著者は round table activity の "Cries of the world"2 という分科

会で、「ある種のイニシエーションとしての個性化プロセス—ある日本人女性の箱庭療法事例—」を事例発表した。全体講演 (9 つの Keynote レクチャー) が理論的な内容が多かったのに対して、分科会では著者の発表を含めて臨床的な事例発表が多かったようである。理論も臨床実践の中から紡ぎだされるものであることを考慮すると、著者の発表も「臨床から出発するという原点」を提示することができ、全体に対しても寄与出来たのではないと思われる。著者の発表の討論では、アイオーン像、チャクラの図、哲学の樹、ユングのマンダラで表現されたプレロマなどを拡充法で提示しながら考察を深めた。臨床と理論の架け橋の一助足り得たであろう。また、Keynote5,8 は講演者自身の臨床経験、臨床実践に基づく味わい深い内容であった。夫々アメリカやスイスにおいて、日本とは違った表現をとりながらも、臨床の深みでは普遍的なたましいに響く共通性をもつことが再認識させられた。Keynote1 では河合俊雄教授による「足で巡る」日本のマンダラの紹介があり、西洋人の聴衆の多くはその独自性に感銘を受けているようであった。その他の Keynote では、脳科学の観点から箱庭作品を検討する観点、「音楽」を喩にクライエント・セラピスト間の相互作用を検討する観点など、参考になった。動画を交えて、母子間 (ヒト、サル) の相互作用を参照するなど、ヴィジュアルな提示の仕方は参考になった。総会では、次期会長に、日本人としては初めて京都文教大学の名取琢自教授が選出された。日本や東洋への関心がク

学界報告

ローズアップされる中、実り多き大会で
あったとの感を噛み締めている。

(鈴木 康広)